京都美術の歴史学　－ 京都芸大の 1950 年代 －

2017 年度活動報告

独自の歴史と経済活動をもつ古都・京都においては,「美術」の近代化も東京とは異なる発展を遂げた。美術家たちは京都の文化や産業と結びつきながら，他分野の芸術とも緩やかなつながりを保ちつつ制作を行ってきた。そして，彼らが拠点とした京都芸大とは，美術家が教育を通じて新しい芸術理念を実践する「実験場」であり続けてきた。本プロジェクトでは，本学教員であった美術家の活動と京都芸大での教育について，美術史・社会史・教育史の横断的な観点から再検証することを目標とする。

その中で注目したいのが，京都芸大が大学に昇格した 1950 年およびその前後の状況である。これはアジア太平洋戦争敗戦による占領期（1945-52）にあたるが，とりわけ京都は西日本最大の米軍駐屯地であった。前衛美術を育むこととなる京都芸大の新たな教育改革が，複雑な状況下ですすめられたことは重要である。このケーススタディとして調査したいのが，1953 年に始められた彫刻科の教育改革である。教員であった辻晉堂（1910-1981）と堀内正和（1911-2001）による立体制作のカリキュラムは，抽象というモダニズム概念をいち早く大学教育に取り入れたものであった。文献や一次資料の分析，カリキュラム創設当時の学生への聞き取り調査をもとに，戦後復興期の京都で抽象教育が根付いていった実態を検討していく。

本プロジェクトでは将来的には他分野の研究者を招聘して研究会を行い，学際的な議論の場をうみだすことを目指す。京都の美術を再評価するのみならず，東京（中央）中心に書かれる日本美術史を相対化し，多様な歴史のあり方を提示する契機としたい。

菊川 亜騎

辻 晉 堂と堀内正 和 , 京 都国立 近 代 美 術 館にて,19 51 年 ,作家 遺族蔵